

先輩からのエール

～102回大会世代から～



いづみ、ともや、2003年生まれ。大阪府出身。埼玉・花咲徳栄で18、19年に全国選手権大会に出場。高校通算50本塁打。20年秋のドラフト1位でソフトバンクに入団。右投げ右打ちの内野手。身長181cm。体重85kg。

(写真は球団提供)

甲子園は、やっぱり

井上朋也内野手 (花咲徳栄出身)

去年、全国選手権大会の中止を知ったのは練習中でした。どこか心の中で中止になる準備をしていた人がほとんどだったように思います。同じ学年には卒業後も野球を続ける選手が多く、「次は進路に向けて準備しよう」という感じでした。ただ、まだあの舞台を経験していない3年生もいたので、行かせてあげたかった気持ちがありました。

夏の甲子園は、やっぱり楽しい。1、2年生の時にいさせてもらって、お客さんの数がすごかった。より野球が好きになる場所じゃないかなと思います。だから、仲間にもあの舞台を経験してほしい。

休校になってくると、退屈で、退屈で、実家にいる人も多かったです。学校もなくて、練習も毎日、自主練習。仲間と会えないのはこんなにつまらないのかと思ったり。今の高校生にも、野球ができるのは当たり前ではないと思ったり。時間を大切にしながら練習に励んでほしいです。

今年は、開催されることを願っています。高校野球は多くの人に元氣、活力を感じてもらえる、影響力の大きなスポーツだと思います。その中心に、特に母校の後輩たちがなっていてくれればうれしいですね。

また、より野球が好きになる場所じゃないかなと思います。だから、仲間にもあの舞台を経験してほしい。

今年、開催されることを願っています。高校野球は多くの人に元氣、活力を感じてもらえる、影響力の大きなスポーツだと思います。その中心に、特に母校の後輩たちがなっていてくれればうれしいですね。

培った心 大海原へ

吉田拓矢さん (いわき海星出身)



僕はいま、船舶機関士をめざして勉強をしています。父が宮城の気仙沼でサンマ漁船をしていて、その姿を見て海で働くことに決めました。

いわき海星はこの春、小名浜と統合し、小名浜海星に校名が変わりました。昨年は僕にとっても学校にとっても最後の夏。21世紀杯で選抜に出た2013年以来の甲子園が目標でした。5月、大会の中止を知った時は、頭が真っ白になりました。「今までの努力は無駄だったのか」と。でも、野球部

に入った時に親とかわした「最後までやりきる」という約束を果たそうと前を向きました。

福島の独自大会は16強止まりでしたが、試合が終わった瞬間は充実感でいっぱいになりました。主将として、4番打者として挑んだあの夏は僕の青春です。同級生はたったの6人でしたが、チームワークは日本一だと思っています。

みなさんも、コロナ禍で思うような練習ができない日々が続きますが、あきらめない気持ちを持ち、頑張ってください。ユニホームを脱いだときに、きっと達成感を味わえますから。僕も野球で培った心で、大海原で活躍できる人間になりたいです。

コロナ禍で中止となった昨年の第102回全国高校野球選手権大会。涙をのんだ昨年の高校3年生世代から、現役選手たちへのエールを伝えます。



▲Cチームだった武者はリーグ戦で高打率を残して春の県大会のメンバーに入った
▲練習中、iPadに選手のデータをを入力する仙台育英の学生コーチ、守谷



野手はまず測定会のデータに基づいて、点数の高い12〜15人がA、続く12〜15人がBという順にDまでの4チームに分けられる。投手はプロ野球のドラフト会議のように、各チームが指名して選ぶ。

「まずは、選手に目標を可視化させてあげることが大事。どれくらいのレベルになればメンバー入りできるのか、基準を明確にする必要がある」

データを重視する手法は、一見、無機質な印象も与えがちだが、武者は言う。「結果を出せば試合に出られるし、ダメなら使われない。みんな平等でわかりやすい。控えても、代打、代走、守備固め、と道はある」

選手はまず測定会のデータに基づいて、点数の高い12〜15人がA、続く12〜15人がBという順にDまでの4チームに分けられる。投手はプロ野球のドラフト会議のように、各チームが指名して選ぶ。

見える 長所も 短所も

全90人の能力数値化 競争白熱

公式戦でのベンチ入りは、高校球児にとって大きな目標の一つ。仙台育英は投げる、打つなどの能力を数値化し、そのデータに基づいてメンバーが決まる過程を可視化している。

① 仙台育英

6月上旬の平日。打撃練習を行う仙台育英の選手たちを尻目に、学生コーチの守谷帆久人(3年)はバックネット裏の部屋に向かった。スコアブックを片手に、iPadを開く。「練習試合やリーグ戦の成績を入力するんです」

画面には、全90選手が学年別、守備位置別に分けられ、一人一人の成績が並んでいる。打率や防御率のほか、打者のOPS(出塁率+長打率)や投手のストライク率など高校野球では珍しい項目まで盛り込み、別のページには、年4回行う測定会で集められた打球速度や球速、

出場機会を得るには…代打の切り札だ!!

■仙台育英のベンチ入りメンバー選考の流れ

春、夏の宮城大会前、新チーム移行時、冬季練習開始時の年4回、測定会を実施

「投力」を球速、本塁から二塁間の送球などで、「走力」を盗塁、二塁打走などで、「打力」を打球速度、飛距離などで測定

測定会の数値をもとにレベルが高い順にA～Dにチーム分けし、リーグ戦を行う(1チームの野手は12～15人、投手は別途、各チームからの指名に基づいて分配する)

一定期間のリーグ戦優勝チームの選手が公式戦でベンチに入る

先発メンバーはリーグ戦、対外試合(練習試合)での個人成績などをもとに決定

優勝チーム以外から、リーグ戦、対外試合の個人成績などをもとにベンチ入りメンバーを追加

一塁まで駆け抜けるタイムなど、個々の基礎能力が記されており、成長具合やチーム内順位が一目でわかる。

「選手それぞれ長所や短所が数値として表れ、ライバル選手との比較もできる。夏に向けチーム内競争はさらに激しくなっています」

「甲子園より緊張」
野手はまず測定会のデータに基づいて、点数の高い12〜15人がA、続く12〜15人がBという順にDまでの4チームに分けられる。投手はプロ野球のドラフト会議のように、各チームが指名して選ぶ。

入学以来、力量が数値化されてきたことで自分とチームの長所、短所を把握し、出場機会を得るために何を目標すべきかを考えることができた。その結論が「右の代打の切り札」だった。「得意の打撃を磨くしかない」と周りが守備練習をしている時もバットを振り込んでいた。1年冬に1.055だったスイングスピードは今年の年明けに1.38*に上がった。

データを重視する手法は、一見、無機質な印象も与えがちだが、武者は言う。「結果を出せば試合に出られるし、ダメなら使われない。みんな平等でわかりやすい。控えても、代打、代走、守備固め、と道はある」

考える 練習も スタメンも ② 浜松西



浜松西の主将中村右から2人目らと佐藤監督(左)のミーティング

浜松西は選手が主体となり考えることにこだわります。右腕、横山和真(3年)は6月第2週のテーマをクイック投球と設定した。水曜はクイックでの速投、木曜はクイックで打者と対戦などと自分で細かく設定し、週末の練習試合に備えた。結果は強豪相手に完投勝ち。5失点したが、走者を出してからギアを上げるという課題を試せた。

主将の中村有翔(3年)を中心に練習メニューは選手が考える。重点的に取り組むのが課題練習。個人で課題を設定することもあれば、投内連携などチームの

課題に取り組む日もある。練習試合の先発メンバーも考えるのは選手だ。主将と副主将で相談する。「苦手な変化球打ちを克服できているから」などと佐藤監督(47)に起用の意図を説明し、納得させられれば採用される。その練習試合のオーダーや結果をもとに公式戦のメンバーは監督が判断する。

県立の進学校。2014年に佐藤監督が兼任し、選手主体の考える野球に力を入れてきた。「普通に練習するだけでは勝てない。考えることによって意欲的になって勝つ確率が上がる」と監督。横山は「自分で考えて試すことで分かることが

多い。あの試合で左打者への内角直球が課題だと気づいたので、次はそれをテーマにする」と話す。

甲子園出場は81年夏が唯一。それでも19年秋に県大会8強に入り選抜の21世紀杯の県推薦校に選ばれるなど、再び力をつけている。(大坂尚子)